九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

スピノザにおける人間の本質としてのConatusの概念について

林，賢市

https://doi.org/10.15017/2543806

出版情報：哲學年報. 15, pp.200-216, 1954-02-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

スピノザにおける人間の本質としての Conatus の概念について

林　賢市

一、神の能力　スピノザによれば、個物は唯一の實體(Substantia)たる神の本質を表現する樣態(modus)である。(Eth. I. prop. 15 dem.)故に、個物は全て、神において存在し神において活動すると考えられる。從つて「神はあらゆるものの內在的原因(causa immanens)であつて、超越的原因(causa transiens)ではない」と云う。(Eth. I. prop. 18.)卽ち、スピノザの神は、單に個物の第一原因(causa prima)であるのみならず、個物の存在及び活動の絕えざる原動力としての性格をも有する。(Eth. I. prop. 24 Cor.)かゝる動的なる神の本質を、スピノザは、神の能力(potentia)と呼ぶ。(Eth. I. prop. 34.)

二、個物における Conatus　さて、スピノザの云うところの個物における Conatus なる概念について、我々は、それが一元的にではあるが二重の意義を有してくることを見出す。卽ち、先づ、それは個物が自己の有(esse)を維持せんとする努力として考えられる。そして更に、この自己保存の Conatus が人間という特殊なる個物に於いて現われてくる場合、それは自己の存在を益々確乎として維持せんとする努力、云いかえれば自己の本性を純粹に表現せんとする自己發展の努力としての意義を有してくる。

個物における自己保存の Conatus についてスピノザの云うところを要約すれば、先づ、個物の本質（essentia）は存在（existentia）を含まない。即ち個物は自己の本性の必然性から存在するのではない。（Eth. I. prop. 24）然し、個物は神の modus として、神の本質即ち神が存在し活動する能力（potentia）を或一定の仕方で表現するものとして存在するのである。故に、一度自然の秩序の中から（他の個物との關係に於いて）存在と作用とに決定せられる場合、その個物の本質に我々が着目すれば、その中に何らの自己矛盾を含まないことを見出す。従つて個物は自らを滅す如き本性を有せず、むしろ出來うる限り自己の有（esse）に固執しようとするのである、とスピノザは云うのである。（Eth. III. prop. 4. 5. 6.）このスピノザの言を考察すれば、個物の存在（existentia）は神が自己自身を表現する仕方にほかならないこと、従つて、個物の本質（essentia）とは、個物が自己の有に固執せんとする努力として自らを現すところの神の potentia にほかならないことを見出すのである。云いかえれば、神の potentia を、スピノザはもともと現實的（actualis）なものとして考えていたのであつて、何らかの潜勢的なものと解すべきではない。かかる個物の中に表現されたる神の potentia をスピノザは、個物の與えられた本質、又は現實的本質（actualis essentia）と呼ぶ。（Eth. III. prop. 7）それはあくまで個物の中に表現された神的なるものとして無限定な時間（tempus indefinitum）を含んでいると考えられている。（Eth. III. prop. 8）かく考えてくれば、個物の本質（essentia）は、自己の有に固執せんとする conatus としてそれ自身直ちに動的な意味を有する。スピノザが「神が活動しないと考えることは、神が存在しないと考えることと同様に不可能である。」（Eth. II. prop. 3 schol.）と云つたと同じ様な意味において、個物が存在するということ、そのことが即ちそれが自己保存的に働くこととして理解されねばならないのである。

三、個物における因果系列　かく個物の存在は、神の potentia を表現するが、他方、個物は無限の因果連結の中に編み込まれた存在として考えられる。(Eth. I. prop. 28.) 即ち、個物はたとえその Conatus が神の potentia の表現であつて、それ自身としては無限定な時間を含むものであつても、そのことは「物が存在に固執することの原因」(Eth. I. prop. 24 Cor.) 或いは、内在的原因としての神からの規定であつて、他の個物に變狀したと見られる限りでの神から來る規定ではない。個物の有限なる存在及び作用は、同樣に有限な他の個物から、即ち有限なる modus に變狀した (affectum) と見られる限りでの神から生起せられ消滅せられる。換言すれば、個物はそれ自身としては無限定な時間を含んだ本質を有しながら、他の個物との有限なる時間をもつた關係の中に生み出されると考えられる。スピノザに於いては、個物は、現實的本質と存在 (existentia) との間に、かゝる二面性を有するものとして捉えられている。

四、特殊なる個物としての人間における Conatus　次に人間における自己發展の努力としての Conatus なる概念については、感情論とも云うべき「エチカ」第三部において、その本來的な意味を見出す。それは先づ人間における衝動 (appetitus) として考えられ、それは「自己の維持に役立つすべてのことが、それから必然的に出て來て、結局人間にそれを行わせるようにさせるところの人間の本質そのものにほかならない」と述べている。(Eth. III. prop. 9 schol.) ここでは、先に個物一般について考えられた自己保存の Conatus が、特殊なる個物としての人間において考えられているのであつて、それは、自己の維持のために他のものを求めたり拒否したりする本質的活動として考えられている。更に「エチカ」第四部に至ると、「眞に有德的に働くとは、我々においては、理性の指導に從つて行動し、生活し、自己の有を維持する（この三つは同じことを意味する）こと、しかもそれを自己の利益を求めることに基づいてすること、にほか

ならない。」(Eth. IV. prop. 24) と述べ、先に人間の本質として考えられた自己保存の Conatus が、こゝでは、それを露はにし、自己の利益を求めることを以て、人間の行動の指針として示されてくる。

このように、自己發展の努力なる概念は、個物一般の現實的本質たる自己保存の Conatus を、人間という特殊の個物において捉え、これを價値づけたものであるとすれば、人間における Conatus の概念について考察を進めるに先だつて、先づ人間についてスピノザの規定している諸點を考えて見なければならない。

五、人間の規定 I　「人間の本質は必然的存在を含まない」とスピノザは云う。(Eth. II. ax. 1.) 即ち、人間は實體ではない。唯一の實體たる神のみが能くその本性の必然性から存在するのである。從つて人間は、その本性の必然性からでなく、他の同様に有限な個物から存在と働きとに決定されると考えられている。換言すれば、人間は無限者の本質を特殊なる仕方において表現するところの、有限なる modus にすぎず、この有限なる modus は、他の有限なる modus によつて存在と働きとに決定せられ、更にこれも又、同様に有限な他の modus によつて存在と作用とに決定せられる。かくして無限の因果系列が存するとスピノザは考える。人間はかゝる無限の因果系列の中に生み出されたる有限な一存在にすぎない。スピノザが「この或いはかの人間が存在することも存在しないことも、同様に自然の秩序から起りうる。」(Eth. II. ax 1.) と云うのはかゝる意味であると解される。此の様に、無限の因果系列の中の有限なる modus の各々は、それ自身の本性からその存在が歸結されないとすれば、この無限なる因果系列の全體は、何によつて存在が與えられるのであるか、それは神にほかならない。(Eth. I. prop 16 Cor. 1, 3) 何故なら神のみが實體であり、無限の realitas を有すると考えられるからである。更にスピノザは「神とは絶對に無限なる實有 (ens absolute infinitum)、換言すれば、各々が永遠無限の本質を

表現する無限に多くの屬性（attributa）から成つている實體、と解する」と言う。（Eth. I. Def. 6）即ち、それ自身としてはその本質から存在が歸結せられぬ modus が、他の同樣に有限な modus によつて、現實に存在と作用とに決定され、且つ各々何らかの realitas を有することに着目する時、その有限なる modus の無限なる全體において、自己の realitas を表現しているところのものが神にほかならない。云いかえるならば、スピノザの神は、個物に即して、その存在の支點乃至基盤として內在的に捉えられたる神であり（Eth. I. prop. 18）或いは、現實に個物の存在と活動として、自己の本質を表現している主體として理解されたる神である。（Eth. II. prop. 3 schol. 故に「神は物が存在し始める原因であるばかりでなく、物が存在に固執することの原因でもある。」（Eth. I. prop. 24 Cor.）

然し、第一原因としての神は、我々がものの本質について、それが存在（existentia）を含まぬことを考察し、無限の因果系列を遡りゆくならば、絕對に至りえない無限の彼岸の存在として遠のかざるをえないであろう。故に又、我々はそれを個物の存在の第一原因として單に要請するにとゞまると考えざるをえないであろう。然し、また、我々がものの現實的本質（essentia actualis）に着目する時、神はものの存在の內在的原因たることを承認せざるをえない。いな、既に述べたように、ものはこの內在的原因としての神なしには、（同じことをものに即していうと）それ自身現實的本質として神を表現することなしには、存在することも、他のものとの因果系列の中に決定せられることも出來ないのである。

斯く神と個物との關係を考えるならば、人間とても同樣である。即ち一面において他の有限な個物との無限の因果系列の中に存在と働きとに決定されながらも、他面では、神の potentia において存在し、且同時に自己の存在を維持せんとして働くのである。

六、人間の規定 II　スピノザは「人間思惟する」とい

う命題を公理として掲げる。(Eth. II. ax. 2) 然らば何故人間一般について、思惟することを公理として主張しえたのであるか。先に述べた如く、人間は神の本質を表現する modus であつた。而して神の本質を構成し、その realitas を表現するものとして、スピノザは、思惟 (cogitatio) 及び延長 (extensio) の二屬性を考える。即ち神は思惟するもの (res cogitans) であり、延長するもの (res extensa) である。

神が思惟するものであるとは、神が無限に多くのものを無限に多くの仕方で思惟しうる實有であること、或いは、思惟することにおいて無限なる能力を本質とすることにほかならない。言いかえれば、個々の思想の中にその概念が含まれており、又、それによつてすべての觀念が考えられもする樣な、言わば思惟の類において無限なる realitas を表現する如き屬性を有するという事に他ならない。從つて、神は、その本性の必然性から生起するあらゆるものについて、觀念をもつことが出來うる。然しかゝる思惟する神の能力は、單に可能的なる potentia を意味するのではなく、現實的能力 (potentia actualis) であることは先に述べた如くである。從つて、神がその本性から生起する一切のものの觀念をもち得ると云うことは、同時にかゝる一切のものの觀念が神のうちに存することを意味する。(Eth. II. prop. 3)

而して、スピノザにおいては、かゝる神の觀念の對象 (ideatum) が即ちもの (res) であり、觀念とものとは恰も、同一物の表裏の如く合一していると考えられている。(Eth. II. prop. 6. Cor, prop. 7. Cor, schol. ff.) この res と表裏一體をなす觀念が、結局ものの精神 (mens) として考えられてくるのであつて、その故にスピノザは人間一般について「人間は思惟する」と主張するのみならず、萬物全て有心なることをも主張するのである。(Eth. II. prop. 13 schol.) かくて人間精神は神の無限なる知性の一部と考えられる。(Eth. II. prop. 11 cor.)

七、人間の規定Ⅲ　更にスピノザは「人間は精神と身體とから成り、兩者は一體をなしている」と考える。(Eth. II. prop. 11. 12. 13. cor. schol.) これは如何なる意味を有するか。先づ、延長は神の屬性の一つであり、その modus たる物體の存在について、スピノザは明白なる公理としてこれを掲げている。(Eth. II. ax. 5) 從つて人間身體は神の行動する現實的能力を表現する modus であり、神の無限なる本性から形相的に (formaliter) 生起するものの一つである。そしてかゝるものは何一つ神によつて知られざるものはない。即ちそれは、同時に神の知性のうちに想念的に (objective) (即ち觀念として) 生起するのである。人間精神はかゝる神から生じた觀念の一つとして考えられるのであるから、それは神の現實的能力から形相的に生起したところの對象 (idea-tum) を有しなければならない。從つて人間精神が現實的に存すると云われる所以は、現實的に存在する個物を對象とするが故でなければならない。では、この現實的に存在する個物とは何を指すのであろうか。スピノザは「我々は或物體が多様の仕方で刺戟される (affici) のを感ずる」という公理 (Eth. II. ax. 4.) をもととして、精神と表裏一體をなす物體とは人間身體にほかならないこと、及び人間精神が現實に存するといわれる所以としての現實に存在する個物とは、人間身體にほかならないことを主張する。即ち、この身體の刺戟狀態 (變狀) (affectio) は身體なしには存しえないし、從つて身體の本性を含んでいる。精神はこの身體の變狀を知覺する (即ちその觀念をもつ) のであるが、その觀念は同様に精神の本性を含んでいる。故に身體の變狀とその觀念が表裏一體をなしていることは、精神の現實的存在が身體をその對象としていることを意味し、更に精神は身體の變狀の觀念を通して身體の存在を知ることになる。

さて、人間精神は神の思惟の本質から生起した一様態であり、神のうちには、神から生起する全てのものの觀念が存すると考えられるのであるから、人間精神につい

ても神の中にその觀念が存しなければならない。而して「精神のこの觀念（卽ち觀念の觀念 idea ideae）は精神自身が身體と表裏一體をなしていると同樣の仕方で精神と一體をなしている。」（Eth. II. prop. 21.）然しこの場合、idea と idea ideae とは同一物の表裏の關係にあるのでもなく、又、神が二種類の思惟の屬性を有し、その modus として考えられているのでもない。「精神の觀念卽ち觀念の觀念というものは、實は觀念——その對象との關係を離れて、思惟の樣態として見られる限りでの——の形相（forma）にほかならない。（Eth. II. prop.21 schol.）從つて身體の變狀についても、我々はそれを知覺する（卽ちその觀念をもつ）のみならず、知覺することを知る。然るに先にのべた如く、身體の變狀の觀念は、云わば精神の變狀なのであつて精神の本性を含んでいるから、身體の變狀の觀念の觀念は卽ち精神自身の認識にほかならない。換言すれば「精神は身體の變狀の觀念を知覺する限りにおいて自己自身を認識する」のである。

以上述べて來たところを端的に表現するならば、人間精神が現實に存在すると云われる所以のものは、先づ何よりも身體の觀念としてであるということ、更に、精神はその働きの自覺においてのみ自己及び身體、云いかえれば人間自身の存在を認識するということ、然も注意すべきは、スピノザが「我々は身體が絶えず刺戟されるのを感ずる」と云つているように、身體とは絶えず外部の物體との關係によつて變狀しゆくものとであり、從つてその觀念たる精神も又、たえず變狀しゆく觀念の連續として考えられており、かゝる精神の活動狀態の自覺においてのみ、主體たる精神の存在が自覺せられるということ、そして更に、かゝる身體の變狀とその觀念とが表裏一體をなしているということ（スピノザはかゝる仕方で物體を觀想することを表象する（imaginari）と云い、かゝる身體の變狀を、物の表象像（imago）と呼ぶのであるが）、以上の諸點である。かく考えれば、スピノザの言う身體（corpus）とは、單に物理的意味での物體で

はなく、觀念の對象としてこれと表裏一體をなせるものであつて、認識し、意志し、欲望し、感ずるところの人間の働きは、精神的であると同時に身體的であると考えられねばならない。

八、人間の本質としての Conatus　さて以上の人間についての諸規定を考察した後、人間における Conatus について考察を進めようと思う。スピノザにおいては、人間の現實的本質は、自己保存の努力として、動的に捉えられているが、それは人間にとつて主體的には如何なる形で意識せられてくるのであろうか。スピノザは言う。「この努力が精神だけに關係させられる時には意志（voluntas）と呼ばれ、それが精神と身體とに關係させられる時には衝動（appetitus）と呼ばれる。從つて衝動とは、人間の本質そのもの、――自己の維持に役立つすべてのことがそれから必然的に出て來て、結局人間にそれを行わせるようにさせるところの人間の本質そのもの、にほかならない。次に衝動と欲望（cupiditas）との相異はと言えば、欲望は自らの衝動を意識している限りに於いて專ら人間について言われるというだけのことである。この故に欲望とは意識を伴える衝動であると定義することが出來る。」と。（Eth. III. prop. 9 schol.）即ち人間の本質は衝動（appetitus）であり、それは精神的であり身體的ある。意志（voluntas）とは衝動の觀念の面を抽象した呼び方にすぎない。更に欲望（cupiditas）は意識せられた衝動、即ち觀念の觀念において自覺せられたる衝動であると考えられている。然し、自覺されざる衝動をスピノザは人間について考えた譯ではない。何故ならば、身體の動きはすべて、人間のうちにおいては、觀念と表裏一體をなし、この觀念には又それの觀念が、即ち觀念の形相（forma）が存するのであるから。故に人間の本質は慾望であるとも考えられる。

九、受働感情　かく人間の本質を動的なるものとして解するならば、次にその動きの諸形態を考えねばならない。スピノザはこれを能働（actio）及び受働（passio）

なる二種の感情（affectus）に分つ。即ち感情とは、我々の活動能力（agendi potentia）（自己の有のために何らかのものを求めたり拒否したりする Conatus）を増大し或いは減少し、促進し或いは阻害する身體の變狀、及びその觀念であり、我々がかゝる變狀の十全なる原因（causa adaequata）（我々の本性のみによつてその結果たる變狀が明瞭判然と理解される如き原因）である場合我々の感情は能働であり、我々が單にそれの部分的原因（causa partialis）である場合、我々の感情は受働であると考える。さて、スピノザにおいては、身體の活動能力の增大或いは減少は、即ち精神の思惟能力の增大或いは減少を意味することは言うまでもないが、これを精神のより大なる完性性（perfectio）への移行、或いはより小なる完全性への移行と稱する。更に、喜び（laetitia）とは精神がより大なる完全性へ移行する受働、悲しみ（tristitia）とは精神がより小なる完全性へ移行する受働を意味する。而して喜び、悲しみ、慾望の三者を以て基本的受働感情となし、他の受働的諸感情は全てこれら三者より生ずると考える。然らば「より大なる完全性への移行」或いは「より小なる完全性への移行」とは何であろうか。それは、自己の有を維持せんとする Conatus の增大であり或いは減少である。即ち、我々が喜ぶとは、喜びを與えるものを益々求めんとし、我々が悲しむとは、悲しみを與えるものを益々拒否せんとすることを意味する。かくて、愛 amor とは外部の原因の觀念を伴える喜びであり、憎み（odium）とは外部の原因の觀念を伴える悲しみであると定義されてくる。（Eth. III. Affectuum Def. 6. 7.）スピノザは、喜び、悲しみ、慾望を三基本感情と言うが、この中、慾望は人間の本質として、他の二者より更に基本的であると考えねばならない。何となれば、慾望とは自覺せられたる Conatus であり、自己の有を維持せんとする努力であつて、それは人間の本性的動きが一定の方向性を有することを意味するものである。これが精神の面ではより大なる完全性へ

移行せんとする動力であり、目標を與えるもの（スピノザの言葉を藉りるならば、目的原因 causa finalis）であつて、こゝに「より大なる完全性への移行」が喜びとして意識せられ、悲しみはその逆として規定せられている理由が存するからである。さて、先にのべた如く、喜び、悲しみ及びその他の受働的諸感情において、人間の本性はかゝる身體の變狀の單に部分的原因にすぎない。換言すれば、かかる身體の變狀は人間の本性と、他の諸個物の本性を含むものであり、人間と他の諸個物との關係において成立するものである。しかるに、人間は自然の秩序の中において在存と作用とに決定せられるところの有限なる個物であり、自然の一部分であるということは免れえないのであるから、その限りにおいて又、人間が受働的感情を有するということもさけ難いことと云わねばならない。

一〇、能働感情　次に能働的感情とは、スピノザによれば、我々の本性のみによつて理解せられる身體の變狀及びその觀念であるが、果して、自然の一部分たる限り受働を免れえない人間の、如何なる點に於いてかかる身體の變狀は成立すると考えられるのであろうか。先に述べた如く、人間をも含めて全ての個物が、依つて以て存在し活動する所以の能力は、神の potentia の表現にほかならなかつた。從つてたとえ全ての有限なる個物の本質は夫々異なる仕方に於いて神の potentia を表現していても、何れの個物にも共通であり、その部分にも全體にも含まれているところのものが存しなければならないと考えることが出來る。故に人間の身體の變狀が何らかの外部の物體との關係を機緣として成立するものであつても、その變狀のうちに含まれたる共通的なものについては、我々は、むしろ外部の物の本性によらずして我々の本性のみによつて十全に理解できると考えることができる。即ち、かゝる變狀は、むしろ外との關係を機緣として内に自發せるものと考えることが出來よう。換言すれば、我々の本性はかゝる身體の變狀及びその觀念の

十全なる原因であつて、我々は能働であると考えられる。(Eth. II. prop. 38. 39.) 而してかゝる我々の本性のみから生起せる身體の變狀及びその觀念は、我々の本性たる活動能力の純粹な表現であり、Conatusの增大である。その限り又、それは自己の有を維持せんとする自己本來的な運動方向への動きであり、より大なる完全性への移行でもある。從つてスピノザは能動的感情には、喜びと慾望とに關する感情があるのみであつて、悲しみの感情はないと云う。(Eth. III. prop. 59.) 尙、こゝで注意すべきは、慾望は能動的感情にも關係し、然もその根底に存するものとして考えられねばならぬことである。

一一、非十全なる觀念にもとづく認識　以上、人間の本質たる慾望を根底として考えられた感情の二形態について論じたのであるが、然らば精神の純粹な活動とも云うべき認識作用は如何に考えられねばならないであろうか。スピノザに於いては、人間は精神であり身體である。そして慾望及び感情は人間の身體の動きでありその意識に他ならない。然も一は本性的であり、他は隨伴的である。故に認識と雖もこれら慾望や感情の外に無關係に存することは出來ない。我々はむしろ慾望や感情が成立してくる同一の根源から認識を捉えなければならないであろう。スピノザによれば、人間精神を構成するものは十全及び非十全なる觀念であるから、以下その各々に基づいて論じようと思う。

非十全なる觀念のみにもとづいて形成される認識をスピノザは、第一種の認識、意見(opinio)若しくは表象(imaginatio)と呼ぶ。これは感覺を通して毀損的混亂的に且つ知性による秩序づけなしに我々に現示される諸々の個物から、或いは諸々の記號から、例えば我々が或る語を聞くか讀むかすると共に物を想起し、それについて物自身が我々に與える觀念と類似の觀念を形成することから生ずる認識である。換言すれば、それは單に外部の物によつて偶然的にひき起された身體の諸々の變狀及びその諸觀念の連結或いは結合である。この身體の變狀の觀念

は、それによつて我々が外部の物體を現在的なものとして思い浮べるところの、物の表象像（imago）の觀念であつて、それ自身としてはむしろ積極的な（positivum）精神の長所を表現するものであるが、單に、かゝる諸觀念のみにもとづいて無秩序にそれらが結合せられてくる場合、云いかえれば、かゝる諸觀念が十全なる觀念によつて結合され統一されない場合、それは inadaequata なる認識（虚僞）として成立するのである。このような諸觀念の結合は、我々の身體が外部の物體によつて單に偶然的に屢、刺戟されたという事を示すにすぎない。それは人間身體の本性と外部の物體の本性を含んではいるが、何れの本性をも説明する（explicare）觀念の連結ではない。すなはち何れの本性を考えてもそれのみからは理解されえない如き身體の變狀及びその觀念の連結である。故に人間は單にその部分的或いは非十全なる原因であり、從つてそれは人間の受働にほかならない。故に、スピノザにおいては、非十全なる觀念にもとづいて事物を認識することは、直ちに受働を意味するのである。

かく考察してくると表象（imaginatio）と受働的感情との間には本質的な差異のないことを認める。何となれば、受働感情とは、我々の本性が單にその部分的原因にすぎないところの、しかも、それによつて我々の活動能力が増大或いは減少されるところの、身體の變狀及びその觀念に他ならなかつたからである。從つて、我々が感覺或いは表象像のみをもととして、次々と非十全なる認識を形成してゆくにつれて、同時に受働的諸感情を次々と有してゆくことになる。唯、受働感情と非十全なる觀念による認識との區別を考えるならば、前者は人間の Conatus の増大或いは減少に關係する限りでの身體の變狀の意識であるに對して、後者は單にその觀念の結合の面にのみ關して考えられたものと見なすことができよう。スピノザによれば、知性と意志とは同一であつて、意志は觀念が觀念である限り含むところの肯定乃至否定の働きに他ならない。（Eth. II. prop. 49 cor.）而して先

にのべた様に、我々の本質たる自己保存の Conatus は、精神にのみ關して考えられた時には、意志とよばれる。從つて人間の本質たる Conatus は單に感情の根底であるのみならず、認識の面においても同様であると考えねばならない。スピノザが「我々は或るものを善と判斷するが故にそのものへ努力し意志し衝動を感じ慾望するのではなくて、反對に、或るものへ努力し意志し衝動を感じ慾望するが故にそのものを善と判斷する」(Eth. III. prop. 9. schol.) と云うのは、或るものを我々が善なりと認識することは、即ち我々の本性がそれを求めそれを喜んでいることに他ならない、と述べていることと解される。即ち人間にあつては認識と感情と慾望とは、同一の根底から必然的に派生し關連する人間的活動の三つの側面であると考えねばならない。

一二、十全なる觀念にもとづく認識　次に十全なる認識についての考察に移ろう。理性 (ratio) 或いは第二種の認識、及び直觀知 (scientia intuitiva) 或いは第三種の認識とスピノザが呼ぶところのものがそれである。前者は、事物の特質 (proprietas) について有する共通概念 (notiones communes) 或いは十全な觀念 (idea adaequata) から形成せられる認識であり、後者は、神の屬性の形相的本質 (essentia formalis) の十全な觀念から事物の本質の十全な認識へ進むものであり、言わば個物において普遍者たる神を見る認識である。さて、スピノザは、精神は十全なる觀念を有する限りにおいて能働であると考える。何故ならば、かゝる觀念は、人間精神がその十全なる原因であると考えられるからである。然しこれを身體的に考察するならば、「すべてのものに共通であり、そして等しく部分の中にも全體の中にも在るもの」或いは「人間身體及び人間身體が刺戟されるのを常とする若干の外部の物體に共通で且つ特有であるもの、そして等しくこれら各物體の部分の中にも全體の中にも在るもの」は、人間身體の變狀の中に存し、尙且つ身體の本性を十全な原因として有するものであり、從つてか

ゝるものの觀念は人間精神にとつて十全な觀念となる。この事を云いかえれば、人間精神は、事物の特質について共通概念を有し、又、最も普遍的なる存在としての神の觀念を有し、その限りに於いて能動であると考えられる。從つて、精神が十全なる觀念にもとづいて認識を形成する場合、それは單に無秩序に諸觀念を結合するのでなく、事物の共通的秩序に從つて必然的に結合し統一するのであるから、精神は事物について明瞭判然たる認識を形成することとなるのである。このように事物について明瞭判然たる認識を形成することは、これを内から見れば、精神がかゝる認識の確實なることを知ることであり、それ故に又、それは精神の思惟能力の確固たる發現であり、人間の Conatus の增大である。故にそれは人間にとつて喜びであり、かゝる明瞭判然たる認識を與えてくれるものに對する愛であり、又慾望でもある。このように、十全なる觀念から形成せられる認識と能動的感情とは、共にその根を均しくするものでなければならない。

然らば、この十全なる觀念にもとづく認識の中に於いて、人間の Conatus（これを精神の面から見れば精神の自己保存の努力）は、如何なる形で意識されてくるであろうか。それは、理性（ratio）が（明瞭判然と認識することは理性の本性に屬するが故に）益々その本性を維持せんとする努力、即ち理性が益々、事物を明瞭判然と認識せんとする努力にほかならない。したがつて理性の努力は、唯認識することにのみ向けられ、且理性は認識に役立つもののみを、自己にとつて有益なるもの善なるものとして確知するのである。言いかえれば、人間の本質たる自己保存の Conatus は、人間が十全なる觀念から事物の明瞭判然たる認識を形成する場合、理性自身が自己の本性を益々發展せんとするところの、自己發展の努力としての形態をとつてくるのである。

一三、自己發展の努力　斯く考えてくれば、先に非十全なる觀念のみにもとづいて認識を形成する限りにおい

て、いわば盲目的に意志し慾望し努力し、又その故に善なりと判断したところの、人間の本質たる自己保存のConatusは、こゝでは、明瞭判然たる認識を有する限りにおいて、理性として唯明瞭判然と認識せんとする努力であり、それに役立つものを善なりと確知し、從つて又それを求めんとするところの、自己發展のConatusとして考えられるのである。スピノザの意味において眞の德（virtus）とは、人間がかゝる自己固有の法則に從つて働くことにほかならないのであるから、精神の最高の德は、認識する能力を最も完全に現すことであり、換言すれば精神の認識する働きにとつて最も有益なるもの、即ち最高の善なるものを認識することである。それは、全ての事物がそこにおいてのみ存在し、そこにおいてのみ考えられるところの無限なる實有、云いかえれば神を認識することにほかならない。しかもスピノザにおいては、神は事物の內在的原因であり、全ての事物の全體にも部分にも等しく普遍的なるものであるから、この神の認識は、事物に即して神を認識することを意味する。從つて精神の最高の德は第三種の認識において事物を認識することであると云うことも出來る。

然し、以上述べてきた如く精神が明瞭判然たる認識を有する限り自己發展的であるということは、單に以上の意味にとゞまるものではない。スピノザの言う如く、人間精神は十全なる觀念及び非十全なる觀念から成つており、非十全なる觀念にのみもとづく認識は、それが虛僞（falsitas）と言われる所以の積極的なるもの（positivum）を有せず、單に十全なる觀念の缺如（privatio）にすぎないとすれば、人間が十全なる觀念を有することは、精神が非十全なる觀念に通常含まれる虛僞（認識のprivatio）を漸次排除して、明瞭判然たる認識を形成してゆく本性を有すること、即ち受働から能働へ移行せんとする本性を有することを意味する。

換言すれば、人間精神は、その本性の必然性に從つて、自己發展的に動かんと努力し、より大なる完全性へ移行

せんと努力するものである。それは又同時に、この様に努力することが善なりという理性の明瞭判然たる確知を含んでいるが故に、人間の行動の規範をも指示するものである。

然し乍ら、かくして人間における最高の完全性に至ることは、人間にとつて本性上可能なることであるにも拘らず、人間の本性的能力は、人間が一定の時と所とに決定せられた自然の一部たる限り、外部の物の力によつて凌駕され壓倒されざるをえない。故にスピノザが「すべて高貴なるものは稀であると共に困難である」と云える如く、人間が能働的狀態を維持し續けることは困難である。かく考えてくると、人間の本質としての Conatus は、それ自身としては神の potentia の表現であるにも拘らず、人間に關してこれを見れば、つねにより小なる完全性から、より大なる完全性へ移行せんとする努力としてとゞまることゝなるのである。